

否定と共起した [指示詞+ほど] の用法について

井本 亮

キーワード：「ほど」、指示詞、否定、スコープ、指示機能

要 旨

「これほど・それほど・あれほど」は、指示機能を持つ副詞句として一律に扱われてきた。しかし、否定と共起した用例を調査すると、各句の用法には顕著な偏りが見られる。本稿では、こうした [指示詞+ほど] が否定と共起した際の用法について、用例調査をもとに考察し、各用法の分化が否定のスコープと指示対象の有無に対応していることを指摘する。また「それほど」だけが呼応副詞として機能することが、ソ系列指示詞の消極的な指示機能という性質によるものであることを指摘する。

0. はじめに

本稿は、「これほど・それほど・あれほど」が否定と共起したときの意味・用法を考察し、その異同を明らかにすることを目的とする。本稿では「これほど・それほど・あれほど」を [指示詞+ほど] という構成的成分として扱う。その理由は、第一に「これほど・それほど・あれほど」にはいくつかの用法があり、それは「ほど」の用法として還元できるからである。第二に、実際の用例において「これほど・それほど・あれほど」の間には用法上の差異が見られ、それもまた指示詞の問題に還元されるからである。

また、否定と共起するといっても、その共起関係には大きく二つのタイプが想定される。ひとつは否定のスコープ(scope, 作用域)が問題となるタイプであり、もうひとつは否定を表わす形式と呼応する副詞として機能するタイプである。前者は否定と共起した広義の程度副詞としての、後者は呼応副詞としての問題である。

本稿では、[指示詞+ほど] の用法を観察・記述するために、用例調査の結果を

軸に考察を進める。「ほど」とそれが構成する副詞句の分析、あるいは否定形式と呼応する副詞句に関する先行研究^{*1}において、その用法上の分布の偏りを説明したものは管見の限りなく、本稿の議論はその両者に関して寄与するものであると考えられる。

本稿では、「これほど・それほど・あれほど」を考察対象とし、疑問指示詞を含む「どれほど」は考察対象としない。また、現代日本語では一語として扱われる「さほど」「いかほど」も考察対象から除外する。これらは「さ」「いか」が単独で用いられないことがないので、構成的成分とは考えにくいからである^{*2}。

本稿は、以下のような構成をとる。まず1節において、「ほど」が構成する連用修飾成分の諸用法について概観する。2節では、今回調査した〔指示詞+ほど〕の用例数および用法の傾向を報告し、「これほど(あれほど)」と「それほど」の間に用法上の大きな傾向差があることを指摘する。3節では、否定のスコープについて概観した後に、〔指示詞+ほど〕の用法との関連性を考察する。4節では、指示詞の指示機能の観点から、特に「それほど」における指示機能の喪失について考察し、「それほど」の呼応副詞化傾向が指示詞におけるソ系列の特性に起因することを指摘する。5節は結論と今後の課題である。

1. 「ほど」の用法について

まず、〔指示詞+ほど〕の主要部「ほど」の用法について確認しておきたい。

連用修飾成分を構成する「ほど」については、副助詞として扱う立場と、副詞的機能をより積極的に捉える形式副詞として扱う立場がある^{*3}。本稿はそのうちの後者、形式副詞とする立場を支持し、「ほど」を、補部の意味内容を伴って副詞句たらしめる副詞句の主要部として位置付ける。そして、これを井本(印刷中)に従い「ほど」句と呼ぶ。「これほど・それほど・あれほど」も「ほど」句のひとつであり、「これほど・それほど・あれほど」における各指示詞は「ほど」句の補部ということに

*1 否定と共起する副詞については、たとえば、原田(1981)、近藤(1997)、工藤(1999)など。

*2 ただし、「さほど」については、「それほど」との関連から言及することがある。脚注16を参照されたい。

*3 前者の立場にはたとえば、田中(1977)、丹羽(1992)などがある。後者には奥津(1986)のほか、内田(1976)などがある。なお、本稿での連用修飾成分の定義は北原(1973)に従う。

なる*4。

その「ほど」句の用法であるが、奥津(1986)では次節以下に挙げるような諸用法が指摘されている*5。

1.1. 「非常の程度」

第一の用法は、「非常の程度」と呼ばれるもので、修飾対象の持つ程度性を修飾し、その程度が著しいことを示す(本稿では、以下「非常の程度用法」と呼ぶことにする)。この用法が「これほど・それほど・あれほど」にも見られることは奥津がすでに指摘している(以下、例文・引用箇所中の下線は注記がないかぎり井本による)。

- (1) 金がこれほど威力があるということは…… (奥津 1986: 56(9))
- (2) 彼はそれほどに祖父を嫌っていた。 (奥津 1986: 56(10))
- (3) 忙しいと、あれほど言っておいたじゃないか。 (奥津 1986: 56(11))

また、工藤(1999)が挙げる文脈指示用法も、意味的にはこれに該当する。

- (4) 私はこの塀と門を目前にして、犯罪人とはなにか、について考えました。それほど、この塀と門は印象的でした。(工藤 1999: 102)
- (5) 「あーあ」と誰かが溜息をした。私はこれほど単純な絶望の声を聞いたことがない。それはかなり太くて低い、しかし響のない乾いた声で、長く尾を引いた。7人の仲間の誰が放った声か、推測することはできなかった。それほどそれは人

*4 指示詞を補部とする立場の傍証となる論考に近藤(1990)がある。近藤は指定文・分裂文などにおいて、文脈指示用法における指示詞の指示対象が必ずしも名詞句ではなく、補文であることを指摘した。近藤の指摘に加え、奥津(1986)も否定と共起する「ほど」構文について、補部として現れた名詞句は主文と同一の要素が補文構造から削除されたものと考察している。実例においても[指示詞+ほど]における指示対象の多くが補文構造として解釈される。

*5 井本(印刷中)では、奥津の考察を継承しながら、「ほど」句の用法をさらに分類している。しかし、その分類は狭義の程度性と広義の数量性という観点からのものであり、用法としてはすべて奥津のいう「非常の程度」の範疇に収まるものである。したがって、ここで挙げる用法とは指向性の異なるものであることに注意されたい。

間の声とは似ていなかったのである。^{*6} (工藤 1999: 102)

1.2. 「通常の程度」

第二の用法は、「通常の程度」と呼ばれるもので、つまりは非常の程度用法のような程度の著しさを示さないものである。しかし奥津自身も「何が非常に何が通常かについて絶対的な基準はない(奥津 1986: 57)」というように、「ほど」の用法としてのこの用法を個別にたてることには問題も残ると思われる。そして、次例に見られるように、[指示詞+ほど]には「通常の程度」の用法はないと考えられる。

- (6) 母親が「勉強するにしても病気にならないほどにきなさい」というので、テスト前でも {*それほど/その程度} に勉強しておいた。
- (7) {*これほど/この程度} 金があっても、文庫本がやっと一冊買えるだけだ。

1.3. 「同程度」

第三の用法は「同程度」と呼ばれるもので、補部に名詞句を取り、[NP ほど Pred Neg] という構文で、程度性の比較を表す用法である(以下、「同程度用法」と呼ぶ)。叙述対象を相対的比較基準となる名詞句(=「ほど」句補部)と同じ程度であると捉えるのがその基本構造であるが、常に否定形式と共起する。同じ程度であるという命題を否定することによって、結果的には修飾対象と補部名詞句との程度差が[叙述対象 > 「ほど」句補部]という関係にあることを表わす比較構文として成立している。

- (8) 私は一休ほど人が悪くない。 (奥津 1986: 57(13))
- (9) 日本はアメリカほど大きくない。 (奥津 1986: 57(14))
- (10) 巨人はヤクルトほど弱くない。 (奥津 1986: 57(15))

この用法は [指示詞+ほど] にもあり、このときは指示詞の指示対象が比較基準となる名詞句として指定されているということになる。

^{*6} 工藤は否定形式と共起する事例のみを観察しているため、工藤は「それほど」のみを考察対象としている(したがってここの下線は工藤による)。しかし、「ほど」句の用法という観点からは例文中の「これほど」もその対象となり、その用法は「印象的だ」の程度が著しいことを示す非常の程度用法である。

- (11) (太一が百合子の部屋のテレビをみて) うちのテレビはこれほど大きくないよ。
(12) (太一が大きなテレビを買ったと百合子に話したところ、百合子は「32 インチ型テレビ?」と尋ねた) いや、うちのテレビはそれほど大きくないよ。29 インチだよ。

(11)の「これ」は現場指示用法として「百合子の部屋のテレビ」を指示しており、「これほど」はそれを比較基準として、「うちのテレビの大きさ」に関する程度性をはかっている。(12)での「それ」は文脈指示用法として「32 インチ型テレビ」を指示しており、「それほど」はそれとの比較において、「うちのテレビの大きさ」に関する程度性を示している。いずれにせよ、指示詞が指示対象を指定することによって程度基準を確定することができるために、この用法が現れるのである。

また、この同程度用法に関連して、次のような構文も見られる。

- (13) この大将ほどいきのいい大将は居りません。(奥津 1986: 58(21))
(14) ショーほどすてきな商売はありません。(奥津 1986: 58(22))
(15) 世界のうちでおまえほど歩みののろいものはない。(奥津 1986: 58(23))

先の同程度構文が、同程度であることを否定することによって結果的には相対的比較を示しているのに対して、(13)–(15)の例では比較基準である補部と同程度であるものの存在を否定することによって、補部名詞句の程度性が最も高いことを表している。こうした用法は [指示詞+ほど] にも確認できる。

- (16) (太一が釣り上げたカジキマグロをみて) 今まで、これほど大きいカジキを釣ったことはないよ!
(17) (昨日の試験の感想を尋ねられて) 過去にあれほど難しい問題が出されたことはなかったよ。

この用法は「[同程度]の「ほど」の構文が複雑になったもの(奥津 1986: 60)」といえるが、構文的に [NPほど Pred Neg] から [[NPほど Pred]コト/モノ Neg] に変形しているほか、意味的にいくつかの相違点がある。ひとつは同程度用法が意味的に「否定」を表すのに対して、派生的用法が「ある」の対義語「ない」によつ

て、意味的に「非存在」を表しているという否定的意味に関する相違である⁷。もうひとつは、叙述対象と比較基準との焦点の問題である。同程度用法では「ほど」句補部として現れる要素は比較基準として提示されているのにすぎないのに対して、派生的用法では、「ほど」句の補部の要素が潜在的なスケール⁸上の他者との比較において最も優ることを表すのだから、補部の要素のほうが焦点となっていると考えられる⁹。次の(18)は同程度用法、(19)は派生的用法であるが、後者では「ほど」句の補部が叙述の焦点となっていることに注意されたい(叙述の焦点となるものを下線で示す)。これは〔指示詞+ほど〕であっても同様である(20)(21)。

(18) 土星は木星ほど大きくない。

(叙述の焦点：土星 比較基準：木星)

(19) (太陽系で)木星ほど大きな惑星はない。

(叙述の焦点：木星 比較基準：太陽系の他の惑星)

(20) 土星はあれほど大きくない。

(叙述の焦点：土星 比較基準：「あれ」の指示対象)

(21) (太陽系で)あれほど大きな惑星はない。

(叙述の焦点：「あれ」の指示対象 比較基準：太陽系の他の惑星)

このように、否定的意味の違い(否定/非存在)、および「ほど」句の補部が叙述の焦点となっているか否かという点で両者は異なっているといえる。よって、本稿では同程度用法のうち、非存在文で、「ほど」句を叙述の焦点とする構文によって最上級を表わす用法を「最上級用法」と呼び、同程度用法と区別したい。

1.4. 「呼応副詞的用法」

〔指示詞+ほど〕の用法としてもうひとつ特筆しておかなければならないことは、「それほど」には上述した3用法のほかに、もうひとつ否定形式と呼応する用法が

*7 同程度用法と派生的用法の間に述部に関する形式差が見られることは川野靖子氏からの指摘による(私信)。ただし、ここでは述部の形式の相違というよりも意味的な問題として捉えておく。

*8 否定文に関わる潜在的スケールの概要については加藤(1989)を参照されたい。

*9 潜在的スケール上の他者を想定するという点で、(19)(21)の両文における「ほど」は一見するととりたて的な機能を思い起こさせるが、これらの「ほど」句は依然として連用修飾成分である。興味深い問題であるが、ここではこれ以上言及しない。

認められることである。

工藤(1999)は否定と共起する副詞について実態調査の観点から考察しているが、その中に「それほど」に関する指摘がある。

- (22) 「それほど」は、肯定形式とも共起するが、その場合は、文脈指示用法である。否定と共起する場合も、肯定形式と同様に文脈指示用法の場合もあるが、さらに、「たいして、さほど」と同じく程度・量>に係る部分否定の用法が派生している。(中略)程度・量>の否定の場合は「さほど」と置き換えても意味は変わらない。(：102)

工藤がいう「部分否定の用法」とは、近藤(1997)における否定と呼応する程度副詞、つまり呼応副詞に相当する(よって、以下当該の用法を「呼応副詞的用法」と呼ぶ)。工藤が指摘する通り、「それほど」の用法が否定形式と呼応する副詞として定着しているのであれば、「これほど・あれほど」についても同様の用法がみられるかどうか、そして「それほど」に見られる他の用法との分化をどのように説明するかが問題となる。これで、[指示詞+ほど]には①非常の程度用法②同程度用法③最上級用法、そして④呼応副詞的用法の4種の用法が認められることになる。

2. 「これほど・それほど・あれほど」の用例調査

次に、「これほど・それほど・あれほど」の出現数と前節で規定した各用法の傾向を検討してみたい。用例は『CD-ROM 版 新潮文庫 100 冊』に収録されている日本人作家全作品から採った。

まずは、「これほど・それほど・あれほど」の出現数である(次ページ表 1)。これには肯定形式との共起も含まれる。出現数だけ見ると「それほど」が圧倒的に多く、「あれほど」は少ない。また、「の・な」によって統語的に連体修飾成分となっている例^{*10}を除いた非連体率では、「これほど」の割合がやや低いものの、用例全般的には連用成分として用いられていることが窺われ、本稿での考察対象としては問題はないと思われる。

*10 連体修飾マーカーの「な」が現れた例は一例しかなかったので、ここに挙げておく。

(i) 「おれはまだ、この仏国土の内部を知らぬが、それほどな悦楽の里であるのか」
(国盗)

否定と共起した【指示詞+ほど】の用法について（井本亮）

【表1：【指示詞+ほど】の出現数】

	出現数	連用修飾成分*1	連体修飾成分(1)【の】	(2)【な】	非連体率(%)*2
これほど	285	202	83	0	70.88
それほど	497	422	74	1	84.91
あれほど	189	155	34	0	82.01
計	971	779	191	1	80.23

*1:ここでは、連体位置に現れていることが明示された「の・な」が後続しないという統語的形態的観点から選別した。

*2:全出現数における連体修飾成分(1)(2)を除いた割合。小数点第2位以下四捨五入。

表1では、肯定・否定形式および各用法が混在しているので、次に用例のうち、一文内で否定表現と共起している数および共起率を調べた(表2)。

【表2：共起する否定形式と共起率】

	出現数	否定			小計	共起率(%)*1
		(1)【ない類】	(2)反語表現	(3)言いさし等		
これほど	285	126	8	17	151	52.98
それほど	497	280	2	14	296	59.56
あれほど	189	15	0	1	16	8.47

*1:全出現数において一文内で否定表現と共起する割合。小数点第2位以下四捨五入。

表2における【ない類】には助動詞および補助形容詞の「ない」および「ある」の対義語である「ない」を含む。「反語表現類」とは、文法的・語彙的な否定形式を含まないが、反語表現によって否定が含意されるものを含む。次に例を挙げる。

- (23) おれほど利口な男が、これほどばかな目にあわされることがあってよいものだろうか。(国盗)
- (24) いったいこれほど美しいものが世の中にあるだろうか、それは静視するだけで去ろうとする者に対して制止力を持っていた。(孤高)

また、「言いさし等」とは次のようなケースを含む。ひとつは、「言いさし」、つまり述部が省略されているが文脈的・文法的に否定が含まれていることが推論されるものである。

- (25) 「(中略)誰かが、自宅のは良い番号ですね」と、言うので、「いや、それほど

でも」と、嬉しそうに頭をかきかき、……（数学者）

- (26) 「そうじゃないんですの。ちょっと考えごとがあつてね、ついうっかり……。本当にごめんさい。約束の場所でずいぶんお待ちになって?」「いえ、まあ……それほどは」あの谷口のことだ、二、三時間はポケットで待っていたに違いない。（女社長）

もうひとつは、近藤(1997)において語彙的否定と呼ばれたもので、「文法的には肯定表現であっても、語彙自体に否定の意味を含む(近藤 1997: 96)」ものを指す。

- (27) 地下鉄の進行音がこれほど嬉しく感じられたことは生まれてはじめてだった。
（世界）
- (28) この男が越し方を回想するなどはかつてないことだし、またこれほど長く喋ることもまれなことであつたらう。（国盗）

(27)では述部は「(生まれて)はじめてだった」であり、それ自体は否定的意味を持たないが、反語表現的な効果によって「今まで～ない」ということが文脈上含意される。よって、ここでの「これほど」は「最上級」用法と解釈される。

否定との共起率を見ると、「それほど」の共起率がもっとも高く、6割弱に及んでいる。

次に、こうした否定と共起した用例が前節で確認した用法のどれに相当するかを調査した。それが非常の程度・同程度・最上級・呼応副詞的用法のうちのどれにあたるのかによって、否定との関係は大きく変わってくる。それを示したのが次の表3である。

【表3：否定と共起した際の用法別分布】

	出現数[+否定]	[非常の程度]	[同程度]	[最上級]	[呼応副詞的用法]	存疑例*1
これほど	151	4	2	144	0	1
それほど	296	2	0	0	292	2
あれほど	16	3	7	5	0	1

*1:存疑例は、解釈上、用例の分類が困難であったもの。

この表から、[指示詞+ほど]の用法に関して、非常に興味深い傾向が観察される。全体的に、補部に節をとる「ほど」句の用法においてほぼ全てが相当する非常

の程度用法が〔指示詞+ほど〕では非常に少ない¹¹。また、同程度用法もほとんどない。そして、注目すべき点は、「これほど」の用法がほとんど最上級用法に収斂しているのに対して、「それほど」の用例のほぼすべてが呼応副詞的用法と解釈されることである。しかも「これほど・あれほど」には呼応副詞的用法は確認されないのである。

以上、〔指示詞+ほど〕の出現例を調査した結果から読み取れる傾向をまとめると、次のようになる。

- (29) a. 〔指示詞+ほど〕のうち、「これほど」および「それほど」の用例の過半数がなんらかの否定表現と共起する。
- b. 否定と共起した「これほど」は、ほぼすべて最上級用法として用いられる。
- c. 否定と共起した「それほど」は、ほぼすべて呼応副詞的用法として用いられる。
- d. 呼応副詞的用法は、「それほど」にしか見られない。

調査結果から、「これほど・それほど・あれほど」を〔指示詞+ほど〕として一律に捉えることはできなくなった。奥津(1986)で指摘されたような非常の程度用法は「これほど・それほど」の用例としてはむしろ少数である。〔指示詞+ほど〕の用法に関する記述を行う際には、上記の用例調査からの結果——各句の用法的偏りが著しいこと——を視野に入れ、考察を進める必要がある。

では、このような顕著な差異はどのような要因によるものであろうか。〔指示詞+ほど〕全体の傾向を見ても、最上級用法か呼応副詞的用法に偏っているといえ、各用法への分化はとも並存的とは言えない。さらに特徴的なことは、最上級用法・呼応副詞的用法ともに、常に否定と関わるという点である。そこで、次節では否定のスコープとの関連性を考えてみたい。

*11 節をとる「ほど」句はほぼ全て「非常の程度」用法になる。「ほど」句の補部の意味内容は主文の事態が過剰なために誘発されたと捉えられる事態でなければならない。

(i) 太郎は「まっすぐ歩けなくなる／?*頬にうっすら赤味がさす」ほど酒を飲んだ。

(ii) 先日のホームパーティーには「部屋に入りきらない／?*人影まばらな」ほど客が来た。

こうした意味的制約は「ほど」句の用法記述において非常に重要な問題であるが、これについての十分な考察はなされていない(接近法としては井本(印刷中；脚注 20)に示唆がある)。後学を待ちたい。

3. 否定との関係——否定のスコープと用法の分岐

本節では否定のスコープについて概観し、それが〔指示詞+ほど〕の用法とどのような関係があるかを考察する。

3.1. 否定のスコープについて

否定のスコープに関する論考は多いが^{*12}、総括すると否定のスコープには、①否定のスコープが狭いもの(=述部否定)と②否定のスコープが広いもの(命題否定)とがある。そして、文(または節)内に共起する数量詞・不定詞・副詞などが否定のスコープに収まりうるかどうか、そしてその時の意味解釈が問題となる。ここでは山森(1993)から例を挙げておく。

(30) 誰か(が)来ないと出発できない。 (山森 1993: 1(2))

(31) a. [誰か(が) [来ない]] と出発できない。(Q > Neg)(山森 1993: 1(2'a))

b. [[誰か(が)来] ない] と出発できない。(Q < Neg)(山森 1993: 1(2'b))

(30)に対する解釈には 2 通りある。まず、「来ない人がいると出発できない」を意味する(31a)と、「来る人が一人もいないと出発できない」という意味の(31b)である。こうした解釈の分岐は否定のスコープから説明される。すなわち否定のスコープが不定詞「誰か」よりも狭いスコープをとる(=不定詞が否定よりも広いスコープをとる)ときには、述部「来る」のみが否定され、「誰かが来る」ことは否定されない。これに対して、否定が広いスコープをとる(=不定詞が否定よりも狭いスコープをとる)ときには、「誰かが来る」という命題全体が否定されることになり、「誰かが来ることがない」=「来る人がいない」という解釈になる。本稿では、山森に従って、前者の解釈を「述語否定の解釈」、後者を「命題否定の解釈」と呼ぶことにする。また、否定が狭いスコープをとることを「N スコープ」、広いスコープをとることを「W スコープ」と呼ぶことにする。

3.2. 否定のスコープと程度副詞、〔指示詞+ほど〕との対応関係

否定のスコープおよび共起関係については、数量詞や不定詞だけでなく、副詞も問題になる。一般的に程度副詞は否定と共起しないとされている(工藤 1983 など)。

*12 例えば、加藤(1989)、服部(1991)、山森(1993)など。

(32) きょうは相当さむくない。

この本は大分面白くない。

この電球は少し明るくない。

このひもは非常に長くない。

(工藤 1983 : 186)

しかし、工藤は「多くの程度副詞は純然たる否定形式とは共起しないと言えそうである (:189)」としながらも、興味深い示唆を行っている。

(33) きわめて [好ましくない]

もっとも [欲しくない]

(工藤 1983 : 190)

(34) (前略) 情態副詞や形容詞副詞形が否定の作用域の内部に収まるのと性格を異にする。情態副詞が肯定否定の「みとめ方」以前の述語層に関係するのに対し、程度副詞は述語のみとめ方の層——ただしその対象的側面——に関係する副詞だということになる。(:190)

(33)の例では、程度副詞「きわめて」「もっとも」は否定と共起しているが、(32)の各例と異なるのは、否定のスコープである。すなわち、程度副詞は狭いスコープをとる否定とならば——言い換えれば、程度副詞が広いスコープをとれば——否定と共起できるということになる。

そこで、[指示詞+ほど]と否定との共起関係を、否定のスコープに留意しつつ考えてみる。次の(35)–(38)では、[指示詞+ほど]の用法が否定のスコープの範囲と対応していることがわかる^{*13}。

(35) (先月は店の売上が1万円にしかならなかった)

[あれほど [客が来なかった]] のだから、店がつぶれてしまったのも領ける。

(36) (太一は昨日、「明日は金曜日で給料日だから、会社帰りのサラリーマンがきっとたくさん来ますよ」と言ったが)

今日は [[それほど客が来] なかった] ので、太一は面目なさそうな顔をした。

*13 例文がすべて複文になっているのは、命題否定の解釈が単文では出にくい(山森 1993, 長谷川 1994)ためである。また、例文中の指示詞は、ひとつの指示詞に固定することによって生じる不自然さを避けるため、各用法において自然だと思われるものを用いた。

(37) (今日は仕入れておいた魚が全部売り切れてしまった)

ここに店を開いて以来, [[これほど客が来た] ことはなかった]。

(38) 今日はそれほど客が来なかったので, 落ち着いて話ができた。

(35)は, 述語否定の解釈 = N スコープ解釈である。「あれほど」は「先月の店の売上が 1 万円にしかならなかったこと」を承けて「客が来なかった」という事態に対する修飾限定を行っている。これは非常の程度用法である。店の売上が 1 万円にしかならなかったほど客が少なかったことを表わしているのである。これに対して, (36)は, 命題否定の解釈 = W スコープ解釈である。「太一が会社帰りのサラリーマンがきつとたくさん来ると言ったこと」を比較基準として, それに比肩する数の客が来たということがなかったということを表わす同程度用法である。太一の発言よりも来た客が少なかったことを表わしているのである。(37)は最上級用法で, コト節内は「これほど客が来た」という非常の程度用法 (=非常にたくさん客が来た)で, この節が表す事柄の存在が否定されている。よってここでの否定は W スコープをとると考えられる。1.3節において, 同程度用法と最上級用法の相違点を挙げたが, 否定のスコープに関する限り, 両者に違いはないということになる。

一方, (38)は(35) - (37)とは異なる解釈になる。(38)において, 否定のスコープは N/W スコープのどちらにも設定できない^{*14}。つまるところ, ここでの「それほど」は否定形式と呼応して工藤のいう「部分否定」的な修飾限定を行うにすぎない。したがって, これは呼応副詞の用法である。(38)の「それほど」だけが「さほど」と置換可能であること, 同時にこのときの「それほど」が特に指示対象を指定しなくても意味が通じることにも注意されたい(指示対象の問題については後述)。

このように, [指示詞+ほど]の用法と共起した否定のスコープには相関関係があると考えられる。「ほど」句は通常, 非常の程度用法がその主たる用法であるが, 否定と共起した[指示詞+ほど]の用法は, 「ほど」句の基本的用法よりも否定, 特にスコープとの相関関係に依存して解釈されると考えられる。以上をまとめると次のようになる。

*14 否定のスコープ理論では呼応副詞と共起する否定のスコープを扱うことは難しいと思われる(茂木俊伸氏の指摘(私信)による)。本稿では, どちらのスコープとも決定しがたいという指摘にとどまるが, 否定のスコープが「それほど」の用法に関連しているという本稿の議論において, 決定的な支障にはならない。重要なことは, 否定のスコープ(N スコープ / W スコープ / スコープ関係なし)の異なる 3 つの値が各用法に対応しているということである。

(39) 〔指示詞+ほど〕の用法と否定のスコープとの相関関係：

- a. 非常の程度用法：N スコープ（〔指示詞+ほど〕 > Neg)
- b. 同程度用法：W スコープ（〔指示詞+ほど〕 < Neg)
- c. 最上級用法：W スコープ（〔指示詞+ほど〕 < Neg)
- d. 呼応副詞的用法：スコープ関係なし（「それほど」__ Neg）^{*15}

〔指示詞+ほど〕が否定と共起した場合には、前節の用例調査の結果から主に最上級用法または呼応副詞的用法として用いられること、そして否定のスコープと対応してそれが分岐していることがわかった。しかし、なぜ「それほど」が呼応副詞化しているかという問題は説明されていない。そこで、次節では〔指示詞+ほど〕におけるもうひとつの観点、指示詞の指示機能の問題を取り上げ、「それほど」の呼応副詞的用法について考察する。

4. 〔指示詞+ほど〕における指示機能

まず、「それほど」に関する工藤(1999)の指摘(本稿 1.4節(22))を思い起こしてみたい。工藤は文脈指示用法ではない、つまり指示に関わらない「それほど」が呼応副詞的用法に派生していることを示唆している。また、近藤(1997)は否定と呼応する程度副詞の例として「さほど」を挙げている。「さほど」も通時的に見れば、〔指示詞+ほど〕という構成になっていると考えられるが、現代日本語において、「さ」が指示詞として生産的に用いられることはない。工藤が「それほど」について「さほど」との同義性を指摘し、近藤が「それほど」ではなく「さほど」を取り上げた

*15 ここでの記号“__”はスコープ関係がなく、否定形式とともに「部分否定」を表すことを示す。なお、本稿での「部分否定」という用語は工藤(1999)に従って用いる。すなわち、否定と共起した「大して」と同様の意味を持つことを指すに過ぎず、スコープ関係から導かれたことを意味するものではない。

理由もこうした呼応副詞としての定着度に注目したためであると思われる^{*16}。「さ」の指示機能の喪失が呼応副詞としての定着の要因となっていると仮定すれば、両句の置換可能性などとともに、「それほど」の呼応副詞化の背景が予測されよう。つまり、「それほど」だけが呼応副詞的用法を持つのは、補部である指示詞「それ」が明確な指示を持たないためであると考えられるのである。そして、指示詞に関する先行研究ではそれを裏付ける指摘がなされている。次節では、指示詞としてのソ系列指示詞の特徴を指示詞研究の成果から概観し、その特性が「それほど」の呼応副詞化に敷衍されるものであることを論じる。

4.4. ソ系列指示詞について

指示詞については膨大な先行研究があり、また、本稿の議論に関連するソ系列の指示詞についても、ここでその全てを追うことはできない^{*17}。ただ、日本語指示詞研究の成果として挙げられるもののひとつとして、ソ系列の独立性・特殊性の指摘があるだろう。

端的に言えば、「それ」に代表されるソ系列の指示詞の特徴は、その消極性・中立性である。三上(1955, 1970)は、ソ系列の指示詞の意味が指示作用を失い形式化・中性化した結果、語彙的に編入された例を示している。

(40) a. そして、そんなら、そいじゃあ (三上 1970: 36)

b. それはそれは(非常に)、それが(ところが)、それに(おまけに)、それとも(もしくは)、そんなに、それほど(大して……ない) (三上 1970: 36)

*16 なお、本稿では「さほど」についても、同様の調査を行った。その結果は以下の通り：出現数：137例、否定共起例：129例(共起率 94.16%)、指示対象なし：118例、指示対象あり：5例、存疑例：14例。このうち、指示対象が認められた5例(確例)はすべて否定と共起していない例であり、用法的には非常の程度であった。同時に、当該の例すべてが『国盗り物語』(司馬遼太郎)および『剣客商売』(池波正太郎)、つまり歴史小説という特殊な文体に現れたものであったことに注意されたい。また、存疑例は指示対象が認められるように思われる例である。

(i) 夏の盛りになり、どこの呑み屋にも人が少なくなり、多くの店が長い休みに入るようになっても、私はまだ呑み続けていた。

本来はさほど酒が好きなたちではなかったはずである。(一瞬)

このときの「さほど」は前文の内容「多くの店が長い休みに入るようになっても、まだ(酒を)呑み続けていたこと」を承けているようにもみえる(同程度用法)。

*17 日本語の指示詞研究の研究史的概要と理論的發展については、金水・田窪(1992)を参照されたい。

(41) a. そんなに痛くもなかった

b. それほど心配したものでもない

終の二例は承前のこともあるが、単に「大して」の意味のこともある。

（三上 1955:181-182 下線・傍点は三上。原文の例文はカタカナ混じり表記。(42)も同様）

(42) 中称代名詞も代名詞である限りは先行詞を律儀に承前するが、副詞的な合成になっているものは更に形式化して承前作用も漠然としてくる。例えば次の「それ」はもはや代名詞ではない。

それは——非常に

それが——ところが

それに——おまけに

それとも——もしくは

（三上 1955:182）

他にも、「円的対立においてはもはや指示領分を持たないソレは話手の指定のままに使われる（三上 1955:179）」という指摘があり、ソ系列が現場指示的機能を明確に持つコ・ア系列の指示詞とは異なる特性を持つことを喝破していたといえる。

また、金水・田窪(1990)は、談話管理理論による指示詞のシステム構築を提案する中で、ソ系列の指示詞について「中称として、コやアのすきまを埋める」用法を指摘した。次の(43)における「そのへん」は、特定の現場的・物理的空間を指示するわけではない。視点を共有した話し手と聞き手にとっては「あいまいな指示(金水・田窪 1990:138)」である。

(43) 最近のアイドル歌手はそのへんにいる女の子と変わらない。

（金水・田窪 1990:138(46)）

同様に、金水(1988)は、ソ系列の指示詞の性格について次のように述べる。

(44) コおよびアは、基底空間上の、<自分>の近傍、および<自分>から遠方の対象を直接指示するという積極的な指定が与えられているのに対し、ソはそうではない。コ・アでは覆いきれない、周縁的(中略)な領域を指示するために用いるのである。その意味で、コ・アは一次的指示詞、ソは二次的指示詞という性格付けができるであろう。(：16)

こうしたソ系列指示詞に関する議論^{*18}からは、ソ系列の指示機能の消極性が認められる。実際に(40)－(42)の例においてはソが指示詞であったことは形態上の痕跡からしか窺うことはできない。そして、「さほど」がそうであるように、「それほど」における「それ」には現場・文脈上の明確な指示対象指定の機能を持たずに出現する傾向があることが予測される^{*19}。「それほど」の「それ」が指示対象を持たないときには、非常の程度用法における誘発された事態や同程度用法における比較基準、そして最上級用法における、他者が比肩することができない程度性を備えた叙述対象を指定することができないことは明らかである。結果的に、指示機能を失った、つまり指示対象がない「それほど」が持ちうる用法は、呼応副詞の用法以外にはないということが予測される。

4.5. [指示詞+ほど]の指示対象

ここで、もう一度、用例調査に戻り、用例における「これほど・それほど・あれほど」が、文脈上明確な指示対象を持っているかどうかを検討してみる。[指示詞+ほど]の指示対象は特定の名詞句ではなく補文構造であることも多いので(脚注4参照)、その特定は容易ではないが、一定の傾向は確認できると思われる。次の表4を参照されたい。

【表4：[指示詞+ほど]の指示対象の有無】

	出現数(+否定)	指示対象なし	指示対象あり	存疑例
これほど	151	0	151	0
それほど	296	218	0	78
あれほど	16	0	16	0

実際の用例を検討してみると、「それほど」に関して、全用例のうち、7割強の用例には指示対象が明らかに見つからなかった。ただし、指示対象があるのかないのか定かではない存疑例も確認された。(45)(46)に指示対象が認められない例を、(47)(48)に存疑例を挙げておく。

*18 他にも正保(1981)では、「弛緩したソ」と呼ばれる指示性の希薄化したソ系列指示詞について指摘されている。

*19 井上(1992)では、「こんなに・そんなに・あんなに」について、「[ソ]ンナニ(～ナイ)」における指示性の喪失(21)」が考察課題となることを指摘している。

・指示対象がない例

- (45) 「こんなところにレストランがあるなんてとても気がつかないな」と私は車を店の前の駐車場にとめながら言った。店はそれほど広くなく、テーブルが三つとカウンターの席が四つあるだけだった。(世界)
- (46) 祖母は私が怪しい者ではないかと再確認するように、頭のでっぺんから足の爪先までを見回しながら「お入りください、よかったです」と、どこかうさん臭そうに言った。それほど積極的な勧誘ではなかったので、どうしたものか戸惑っていると、パフィーがもやもやを吹き飛ばすような口調で、「じゃ入りましょう。さあ」と私の目を見つめながら言った。(数学者)

・指示対象の有無に関する存疑例

- (47) 「この原因を知りたいのです。そのなかに記憶喪失の秘密もひそんでいるような気がしてならない。同性愛的な経験がそれと無関係だとすると……あなたにはほかになにかおもしろいことはありますか？」
「かくべつないわ、あたし、未紀とはそれほどふかいおつきあいしてたわけじゃありませんから」(聖少女)
- (48) 衆の答はなかった。南泉和尚は仔猫を斬って捨てた。日暮になって、高弟の趙州が帰って来た。南泉和尚は事の次第を述べて、趙州の意見を質した。趙州はたちまち、はいていた履を脱いで、頭の上ののせて、出て行った。南泉和尚は嘆じて言った。
「ああ、今日おまえが居てくれたら、猫の児も助かったものを」
——大体右のような話で、とりわけ趙州が頭に履をのせた件りは、難解を以てきこえている。しかし老師の講話だと、これはそれほど難解な問題ではないのである。(金閣寺)

このように、否定と共起した「それほど」が指示対象を持つかどうかに関して判定の難しい用例は残るものの、これは決定的な支障をきたすものではない。その理由は、第一に、「それほど」の用例のなかで、明らかに指示対象が特定できない用例は、表 4 にあるように 218 例あることである。確かに存疑例は 78 例と少ないが、これらも指示対象を持つという確例ではない。第二に、「これほど・あれほど」に関して、指示対象が特定できない用例はともに 0 例である。「それほど」に存疑例があったとしても、「これほど・あれほど」には指示対象ありの確例しかなく、存疑例すらないことをあわせて考えると、やはり「それほど」の指示機能は確

実に弱いといえる²⁰。そしてもっとも重要なことは、(43)(44)の例からもわかるように、こうした指示対象が特定できない「それほど」の用例はすべて、呼応副詞的用法として解釈されるということである。

本節では、ソ系列の指示詞が指示対象を持たないという現象を、先行研究および用例調査の側面から考察した。その結果、「それほど」だけが指示対象を持たずに文中に現れる可能性があること、そしてそのときの「それほど」が呼応副詞的用法として解釈されることがわかった。3節において否定のスコープとの関連から考察した際には、「それほど」の呼応副詞的用法はスコープが確定できないといういわば消極的な理由から捉えられるにすぎなかったが、今、指示機能および指示対象の喪失という観点から、指示対象をもたない「それほど」が呼応副詞的用法となること、そしてこの用法が「それほど」だけに見られることが説明されるのである。

5. 結論と今後の課題

本稿では「これほど・それほど・あれほど」の用法の異同について、用例調査を軸に考察してきた。そして、各句における各用法には偏りが見られること、そしてそれは否定のスコープ、そして特に「それほど」のみに見られる呼応副詞的用法については、ソ系列指示詞の指示機能(指示対象)喪失という観点から説明されることが明らかになった。本稿の結論をまとめると、次ページ表5のようになる。

本稿では、先行研究では行われなかった[指示詞+ほど]の用法の実際のかつ包括的な記述を果たすことができた。さらに、本稿で扱った「これほど・それほど・あれほど」だけでなく、指示機能を持つ副詞「こんなに、そんなに、あんなに」「こう、そう、ああ」や指示詞を伴う「程度」および「くらい」などについても、同様の観点から捉えることができると考えられる。

一方で、課題も残る。同程度用法と最上級用法の構文的相違や、否定と共起した「これほど」が最上級用法に収斂する理由、あるいは「それほど」の指示機能などの問題については、考察を深めるには至らなかった。また、用例調査で得られた用例数についての分析も不十分である。これらの問題については、別稿に譲りたい。

*20 しかし呼応副詞的用法の「それほど」は本当に何も指示していないのだろうか。現場および文脈上に指示対象を持たないとしても、同程度用法において想定される程度性スケール上の一点を指している可能性も否定できない。ただし、程度性スケール上の一点を指すということと、指示詞の指示機能とは峻別して扱うべきであるとも思われる。これについては今後の課題とし、結論は保留したい。

否定と共起した [指示詞+ほど] の用法について (井本亮)

【表 5: [指示詞+ほど] の用法と否定のスコープ・指示対象との相関関係】

用法	否定のスコープ	指示対象の有無	分布*1	
			これほど	それほど
非常の程度用法	Nスコープ	あり	2.65	0.68
同程度用法	Wスコープ[否定]		1.32	0.34
最上級用法	Wスコープ[非存在]		98.68	0.34
呼応副詞的用法	----	なし	0.00	98.65

*1: 「分布」は「これほど・それほど」の表す各用法の、否定と共起した全用例中の割合(少数第2位以下四捨五入)。「あれほど」については、有意な数が得られなかったため、ここでは割愛した。

参考文献

- 井上優(1992)「指示表現を含む副詞成分の一特性」『都大論究』29号 13-22
- 井本亮(印刷中)「連用修飾成分「ほど」句の用法について」『日本語科学』第8号
- 内田賢徳(1976)「形式副詞——副助詞の形相——」『国語国文』44, 44-57
- 奥津敬一郎(1978)『「ボクハ ウナギダ」の文法』くろしお出版
- 奥津敬一郎(1986)「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 第1章 凡人社
- 加藤泰彦(1989)「文法——文の意味と否定」『言語』Vol.18, No.5, 44-45
- 北原保雄(1973)「補充成文と連用修飾成分——渡辺実氏の連用成分についての再検討——」『国語学』95集 1-19
- 金水敏(1988)「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学 国文篇』第39号 1-24
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 日本認知科学会
- 金水敏・田窪行則(1992)『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』渡辺実編 明治書院 176-198
- 工藤真由美(1999)「否定と呼応する副詞をめぐって——実態調査から——」『大阪大学文学部紀要』39, 69-107
- 近藤泰弘(1990)「構文的に見た指示詞の指示対象」『日本語学』Vol.9 3月号 31-38
- 近藤泰弘(1997)「否定と呼応する副詞について」『日本語文法 体系と方法』川端善明・仁田義雄編 ひつじ書房 89-99
- 正保勇(1981)『「コソア」の体系』『日本語の指示詞』日本語教育指導参考書 8 国立国語研究所

- 田中章夫(1977)「助詞(3)」『岩波講座日本語7文法Ⅱ』 岩波書店
丹羽哲也(1992)「副助詞のおける程度と取り立て」『人文研究』44, 93-128
長谷川信子(1994)「「も」と否定辞と論理形式」『言語』Vol.23, No.2, 116-119
服部匡(1991)「命題否定に関する覚書」『徳島大学教養部紀要(人文・社会科学)』第26
巻 109-118
原田登美(1981)「否定との関係による副詞の四分類— 情態副詞・程度副詞の種々相
—」『国語学』128集 1-17
三上章(1955)『現代語法新説』刀江書院(1972 くろしお出版より復刻)
三上章(1970)「コソアド抄」『文法小論集』くろしお出版 145-154
山森良枝(1993)「限量表現と否定のスコープをめぐる」『神戸大学留学生センター紀
要』11-38

用例出典

用例調査には【CD-ROM 版 新潮文庫 100 冊】(発行:新潮社 1995)に収録され
た日本人作家による全作品を使用した。以下に収録作品名・著者名および本文中で
引用したものはその略号を記す(作者五十音順):

芥川龍之介『羅生門・鼻』, 有島武郎『小さき者へ・生まれ出ざる悩み』, 阿川弘之『山本五十六』, 安部
公房『砂の女』, 有吉佐和子『華岡清洲の妻』, 赤川次郎『女社長に乾杯!』(女社長), 石川達三『青春
の蹉跎』, 石川淳『焼け跡のイエス・処女懐胎』, 井伏鱒二『黒い雨』, 伊藤左千夫『野菊の墓』, 泉鏡花
『歌行灯・高野聖』, 井上靖『あすなる物語』, 石川啄木『一握の砂・悲しき玩具』, 井上ひさし『ブンと
ファン』, 五木寛之『風に吹かれて』, 池波正太郎『剣客商売』, 遠藤周作『沈黙』, 大岡昇平『野火』, 大江
健三郎『死者の奢り・剣脊』, 川端康成『雪国』, 梶井基次郎『檸檬』, 関高健『パニック・裸の王様』,
北杜夫『繪家の人々』, 倉橋由美子『聖少女』(聖少女), 小林秀雄『モオツァルト・無情という事』, 沢
木耕太郎『一瞬の夏』(一瞬), 志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』, 島崎藤村『破戒』, 司馬遼太郎『国
盗り物語』(国盗), 塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』, 椎名誠『新橋烏森口青春篇』, 曾野綾
子『太郎物語』, 谷崎潤一郎『痴人の愛』, 太宰治『人間失格』, 竹山道雄『ビルマの豎琴』, 田辺聖子『新
源氏物語』, 立原正秋『冬の旅』, 高野悦子『二十歳の原点』, 壺井栄『二十四の瞳』, 筒井康隆『エディ
プスの恋人』, 夏目漱石『こころ』, 中島敦『李陵・山月記』, 新田次郎『孤高の人』(孤高), 野坂昭如『ア
メリカひびき・火垂るの墓』, 林芙美子『放浪記』, 樋口一葉『にごりえ・たけくらべ』, 福永武彦『草の
花』, 藤原正彦『若き数学者のアメリカ』(数学者), 堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』, 星新一『人民は弱
し・官吏は強し』, 松本清張『点と線』, 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』, 三島由紀夫『金閣寺』(金閣寺), 三
木浩『人生論ノート』, 三浦哲朗『忍ぶ川』, 水上勉『雁の寺・越前竹人形』, 三浦綾子『塩狩峠』, 宮本
輝『錦織』, 武者小路実篤『友情』, 村上春樹『世界の終わり』とハードボイルド・ワンダーランド』(世界),
森鷗外『山椒太夫・高瀬舟』, 山本有三『路傍の石』, 山本周五郎『さぶ』, 柳田国男『遠野物語』, 吉村
昭『戦艦武蔵』, 吉行淳之介『砂の上の植物群』, 渡辺淳一『花埋み』

(2000年6月22日 受理)